Tower of Babel

夕咲　紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔｏｗｅｒ　ｏｆ　Ｂａｂｅｌ

【Ｎコード】

Ｎ３６７２Ｘ

【作者名】

夕咲　紅

【あらすじ】

ＭＭＯＲＰＧの一つであるＴｏｗｅｒ　ｏｆ　Ｂａｂｅｌをプレイしていた水原　悠人は、ゲームクリア時に貰える報酬として、ゲーム内容を根本から覆す選択肢である「異世界への旅立ち」を選択する。

その結果、悠人はその文字の通り異世界――Ｔｏｗｅｒ　ｏｆ　Ｂａｂｅｌの世界へとトリップしてしまう。

最強クラスの能力を持ちながら、手探り状態で新たな生活を始める悠人。

突然訪れたセカンドライフ。悠人は自分の作り出したキャラクター、クロウとして今日も塔を目指す！？

＊職業レベルを１０→５０に変更しました。

Ｔｏｗｅｒ　ｏｆ　Ｂａｂｅｌ（前書き）

勢いとノリで掲載してしまいました。
基本的には一話１０００文字程度を目安に軽いノリで書いています。
楽しんで読んで頂ければ幸いです。

Tower of Babel

Ｔｏｗｅｒ　ｏｆ　Ｂａｂｅｌ。

数多くのＭＭＯＲＰＧが存在する昨今、シンプルイズベストを突き進んだゲームの名前がそれだ。

広大な世界を旅する訳でもなければ、世界を混沌に陥れる魔王の様な存在がいる訳でもない。聖書で語れるバベルの塔。その名を模した果てなき塔をひたすら登り続けるだけのゲーム。しかしそれでいて数多くの職業（ジョブ）や技能（スキル）、アイテムが存在し、かなりのやり込み要素を誇る。

冒険活劇なんてない。それでも塔と言うダンジョンをひたすら攻略していく。

最上階が何階なのかなんて明かされていない。プレイヤーは、ただその頂きを目指すのみ。

最上階に辿り着けば、そこにおわす神に一つだけ願いをかなえてもらえると言う。

地上１００階。

数々のトラップを潜り抜け、モンスターを薙ぎ倒し、何度も挫折を繰り返し辿り着いたその階こそが、タワーオブバベルにおける最上階だった。

おそらく、ソロプレイでここまで辿り着いたのは俺が初めてじゃないだろうか。

正直かなり疲れた……

厳かなエフェクトと共に現れる神――

画面上にいくつかの選択肢が現れる。

１・水晶貨一千万枚

水晶貨と言うのはタワーオブバベルにおいての貨幣で最大の物だ。最低硬貨が銅貨で、銅貨１００枚で銀貨１枚。銀貨１００枚で金貨

1枚。金貨１００枚で水晶貨1枚となる。それが一千万枚……
はっきり言って、ゲーム内で金を稼ぐ必要はなくなる金額だ。

２・レベルリセット
現在のステータスをそのまま引き継いでレベル1に戻れるシステムだ。これは他にも専用のアイテムを使えば可能で、俺の知り合いにも行なった奴がいる。そうそう手に入る物ではないが……
それでも、１００階到達ボーナスとしては微妙な気がするな……

３・神々の遺産
どうやら、通常のプレイでは手に入らない装備が手に入るらしい。と言っても貰えるのは一つ。魅力的な選択肢ではあるが、どうにも水晶貨一千万枚には負けるかな。

★異世界への旅立ち
何だこれ？　タワーオブバベルと言うゲームを根本から覆す様な選択肢だな。これだけ番号じゃないし。
ソロ攻略の特典か？
普通に考えれば、バベルの塔がある街以外のマップ開放とかか……
バベルの塔は何度でも攻略可能だが、攻略時のボーナスはその時によって違うらしい。その中でも特別な物っぽい★マーク……
やっぱ、これを選んでおくべきだろう。
俺は一番目の選択肢に後ろ髪を引かれながらも、異世界への旅立ちを選択した。

その瞬間、パソコンの画面が光ったかと思い――

俺の意識は途絶えた……

目覚めは最高？

ぺちぺちと頬を叩かれる感触で、俺の意識はゆっくりと浮上した。

「大丈夫ですか？」

聞き慣れない声にそう聞かれ、俺はそれに答えようと口を開く。

「大丈夫」

擦れた声だったけど、何とか意識した通りに言葉を発する事が出来た。

「もしかして、塔から追い出されたんですか？」

目を開けると、倒れた俺を介抱していたのは知らない女の子だった。はっきり言って可愛い。

亜麻色のショートボブの髪に、くりっとして大きめの碧い瞳。多分小柄だけどそれなりに整った体型をしてると思う。

なんて女の子の見た目を冷静に分析してみて、違和感に気が付く。

ここ、どこ？

とりあえず立ち上がって周囲を見回す。

どこかの路地裏っぽいけど、都会みたいに小汚い感じじゃない。どこかの田舎の民家の裏みたいな場所だ。と言うか、周りにあるのは木造か煉瓦造りの家ばかりだ。

それに目の前の女の子――

どう見ても日本人じゃないよね？

「あれ？　違いました？」

ならどうしてこんな所に……みたいな目を俺に向けて来る女の子。
うん、まあとりあえず――

「いや、間違ってないよ」

と言っておく。状況に流されるのは良くないけど、勘違いは利用するべきだ。

「やっぱり！　でも、こんな所まで飛ばされるなんてついてないですね」
「そうでもないんじゃないかな。君みたいな可愛い子に介抱して貰えたんだから」

おう！？　我ながら誑し的な発言！　目の前の女の子が驚いた表情を浮かべている。そりゃあそうだろう。知らない男にいきなりナンパされたんだから。

「あ、ありがとうございます」

ちょっとだけ頬を赤く染める女の子。あら、意外と好反応じゃないですか。

「ところで、ここはどの辺り？」

ここはどこ？　なんてバカな質問はしない。それじゃあ自分は不審者ですと改めて言っている様なものだ。だから地名か何かを聞こうとする。その場所からここがどう言った所か判断出来るかもしれないからだ。
おぉ！　俺ってば意外と頭の回転速かったのな。

「燕通りの裏手ですよ」

帰ってきたのはそんな言葉。俺の知る限り近所に燕通りなんて道はない。

けど、その通りの名前は物凄く聞き覚えがある。と言うか、個人的には自宅周辺よりも馴染み深い通りの名前だ。

「って言う事は、農村街の辺り？」

俺の厨二脳が今フル活動！　その確認の言葉を放つ。

「はい」

返って来たのは、俺の推論を確証に変える答えだった。

タワーオブバベルにおける唯一の街、ウォークル。塔を中心に円状に広がった巨大な街の西端に、農村街と呼ばれる地域がある。街の中にありながら農業を営む村の様な地域で、街の中心へと続くメインの通りを燕通りと言う。

「ははは」

思わず乾いた笑い声を上げてしまった。

水原（みなはら）　悠人（ゆうと）１８歳。大学進学を控えた冬。異世界にトリップしてしまいましたとさ――

情報収集

「だ、大丈夫ですか？」

再びそう聞かれて、俺は我に返った。

大丈夫か？　いや大丈夫じゃないよ。精神的にはね……

「身体は問題ないよ」

とりあえず、そんな風に答えておく。

問題はたくさんあるけど、とりあえずは確認しておかないといけない事がある。

通りの名前や塔の存在。塔から追い出されたと言う彼女の言葉から察するに、間違いなくここはタワーオブバベルの世界だ。だけど、全てが同じである保証なんて何一つない。

気になる事はたくさんある。現在の街の仕組みは勿論、ここが本当に異世界だとするなら街の外だって存在するはずだ。だけど、今の俺には何が出来て何が出来ないのかも分からない。しばらくは安全な場所で生活の基盤を整えるべきだろう。

「それなら、私はそろそろ失礼しますね」

やはり不審者とでも思われているのか、この場から離れようとする少女。

でも、今彼女を帰す訳にはいかない。だって大事な情報源だもの。

「ごめん、ちょっと待って」

「何でしょう？」

あまり警戒した様子もなく、立ち去ろうとするのを止めてくれる。
あら？　俺ってば意外と警戒されてないじゃないか。

「この辺にはあんまり詳しくなくてさ。近くで一番安い宿ってどこにあるのかな？」

これは方便込み、でも実際に知りたい情報だ。
ゲームと全く同じなら地理に困る事はないが、まずは地理がゲームと合致しているのかどうかが知りたい。

「通りの表に出て、西に少し向かった所にある宿だと思いますよ。と言うより、この辺りで宿って言ったらそこしかありませんから」

そう言って苦笑を浮かべる少女。うん、そんな顔も可愛いね。
って違う！
農村街にある宿は燕通りにある燕尾荘ただ一軒。今の正確な場所は分からないけど、おそらくゲームと違いはなさそうだ。

「名前は？」
「燕尾荘って言います」

名前も一緒だ。まあ、通りの名前も一緒だったし違うとは思わなかったけど。

「因みに、値段ってどれくらいか知ってる？」
「えっと……確か、一人一日銅貨１０枚って、表の看板に書いてあったと思いますよ」

なるほど。物の価値は判断出来ないけど、少なくとも通過は同じみたいだ。

「そっか。ありがとう。えっと――」
「モナカです」
そう言えばまだ名前聞いてなかったな。なんて考える間もなく、親切な少女はそう名乗った。
「ありがとう、モナカ。俺は水(みな)――」
じゃなかった。ここは俺のキャラクター名を言っておくべきだろう。
「俺はクロウ。また縁があったらよろしく」
「はい。それでは失礼しますね」
そう言って笑顔で手を振り、モナカは表の通りへと出て行った。
ゲームの中と同じ様に、この世界にはファミリーネームはなさそうだ。それにキャラクター名に物の名前を使っている点も同じ。
最初はふざけて付けたんじゃないかとも思ったけど、案外マッチしている様にも思える。と言うか、あの見た目なら多少名前が変でも許せるってもんだ。いや、実際似合ってる様にも思えるけど。
まあそれは置いといて。
表通りに出る前に、試しておかないといけない事がある。
まずは、ステータスが確認出来るかどうかかな。

ステータス画面

タワーオブバベルにおいて、ステータス画面を見る方法は二つ。
一つは画面内にあるステータス画面を開く為のボタンをクリックする事。
もう一つは自身が音声登録したショートカットキーを声に出して言う事。
タワーオブバベルは厨二連中に嬉れし恥ずかしくも、マイクを通した音声認識機能が備わっていた。スキル――技名とか魔法とか、もうバンバン叫びまくれって奴ですな。
俺もそんな音声認識機能を謳歌していた一人だ。画面と言うモノが存在しない以上、音声認識によるショートカットキーを利用する他には手立てがない。

「F2、オープン」

俺の場合、ゲーム機能的なショートカットは全てキーボードのFキーを思い浮かべ順番に振った。その方が分かり易いし。F1は何となく違うモノを想像しそうだったので欠番。
俺の言葉に反応する様に、目の前が薄暗くなり見覚えのある画面が現われる。

「おー」

何となく嬉しい。良かったよちゃんと見れて。視界は悪いものの一応景色も見えるし。
ふと気にかかり、横を向く。
画面も一緒に着いて来た。
はい。それが確認したかっただけです。

改めて画面を良く見ると、ゲームの時とは違う点がある。

「能力に関する数値が載ってないな……」

腕力やら何やら、そう言った類いの数値が全て載っていない。数値だけ消えているんじゃなく、項目自体がない。

まあそれは良いや。今肝心なのは俺の強さではない。でもまあ、分かる範囲では確認しておこう。

キャラクターネーム、クロウ。それは分かってる。

性別、男。それも分かってる。

レベル、１００。おお！　俺カンストしてるじゃん。クリア前が９９で、おそらくは塔のボスを倒した時に上がったのだろう。と言う事は、ゲームとリンクしているっぽい。なら期待出来るかな……

所持金、５０００ウォール。

え？　５０００ウォール？　たったの？

あ……

そうか。塔攻略の為に結構浪費したんだった。それに、農場開拓に資金注ぎ込んでたし……

そう言えば、俺の農場ってどうなってるんだろうか？　それも後で確認しに行こう。

そうそう。ウォールって言うのはお金を示す名前で、銅貨１枚１ウォール。つまり俺の所持金は銀貨にして５０枚って事だ。

時間の経過は基本的に地球と同じ様に設定されてたから、しばらくは暮らしていけそうではあるけど……

その前に、どうやってお金を取り出すかだよな。

「……Ｆ３、オープン」

俺がそう呟くと、目の前に大型犬くらいの大きさの箱が現われた。

ゲームで良く見る宝箱っぽい見た目で、何かの金属で出来てるっぽい。
ちょっとびっくりしたのはここだけの秘密だ。
Ｆ３はアイテムボックスを開くショートカットだったんだけど、本当に箱が出て来るとはね。
さてさて、字面では確認しなかったけど何が入ってるのかなぁ、じゃなくて、お金は入ってるのかなぁ。
箱を開けて中を見ると、真っ暗ですよ。日の光が入ってるにも関わらずだ。触ってみると特に感触はない。敢えて言うなら空気に触れた感じだろうか。勇気を出して中に手を突っ込むと、何かに触れた。それを取り出して見れば、それはゲーム画面で良く見たウォール硬貨（銅）だった。

「どこぞのなんちゃらポケットみたいだな」

とりあえず作りは理解したし、アイテムボックスからお金が出せる事も分かった。持ち物の確認とかは宿でした方が良いだろう。
ステータス画面を見ると、所持金が４９９９ウォールに減っていた。
なるほど。あくまでもアイテムボックス内にあるお金がカウントされてるんだな。

「Ｆ２、Ｆ３クローズ」

ステータス画面とアイテムボックスを閉じ、俺は燕尾荘を目指し通りの表へと向かった。

初めての値切り

「おお！」

生の目で見る景色は、壮大とは言わないまでも確かにゲーム内の景色と一致した。

周辺の景色よりも、やっぱり目を惹くのは天を貫くあの塔の存在だろう。

とは言え、今は塔に目を奪われている場合ではない訳で。

俺は真っ直ぐに燕尾荘へと向かう。普段の生活なら西がどっちかなんて分からないが、ここがウォークルならば方角で悩む必要はない。街の地理は把握しているし、中心にあるバベルの塔から遠ざかれば良いだけなのだから。

と言うか、そもそも燕尾荘の看板は通りに出た時点で視界に入っていたんだけどね。

燕尾荘は木製の家屋だ。日本にある一軒家よりは大きいだろうか。家二戸分くらい？

まあ良く分からないけど、泊まるスペースは十分にありそうだ。

入り口に立て掛けられた木製の看板には、お一人様一日宿泊銅貨１０枚！　朝食付き！　と書かれている。

文字が日本語なのは、助かると言うか何と言うか……

「失礼しまーす」

気を取り直して、とりあえず中に入ってみる。

「いらっしゃい」

そんなテンプレの言葉で出迎えてくれたのは、４０歳くらいの恰

幅の良いおばちゃんだ。入って直ぐカウンターがあり、その奥にイスでもあるのか座っている様な態勢に見える。

「泊まりたいんですけど……」

あまり愛想が良いとは言えないおばちゃんの態度に、何となく腰が引けてしまう。

「一泊銅貨１０枚だよ」

うん。実に淡々とした口調だ。この人はこう言う人なんだろう。

よし割り切った。

「しばらくの間泊まりたいんですけど、長期だと割引されたりします？」

レッツディスカウント！　タワーオブバベルでは値切り交渉も存在した。スキルにも値切りってあったしね。俺は持ってないけど。

「長期は一ヶ月単位で受け付けてるよ。一ヶ月の宿泊では銀貨２枚と銅貨５０枚。ただしこの場合は朝食なし。でも銀貨３枚で一ヶ月朝食付きだよ」

ゲームと同じならこの世界の一ヶ月は必ず３０日だ。朝食抜きにすればお得だけど、朝食付きだと特に割引はないのか……

「そこを何とか！」

今後ゲームの時の様に資金稼ぎが出来るとは限らない。少しでも出費は抑えたい所だ。

「そうさね……なら、二ヶ月宿泊を決めてくれるなら、銀貨5枚で朝食付きにしてやっても良いよ」

交渉系のスキルもなしにこの結果なら悪くはないのかな。

所持金の10分の1で、二ヶ月間の寝床と朝食を確保出来るなら上等だろう。

「分かりました。それでよろしくお願いします」

「当然前払いだけど大丈夫かい？」

「はい」

俺はおばちゃんの言葉に頷き、「F3、オープン」と小さく呟く。

すると目の前にアイテムボックスが現われ、おばちゃんは驚きの表情を浮かべた。

「見てくれで冒険者なのは分かったけど、あんた空間魔法が使えるのかい？　若いのに凄いねぇ」

ゲームであるタワーオブバベルにおいて、プレイヤーは冒険者と呼ばれていた。ゲーム上の舞台はバベルの塔一つだけだが、プレイヤーは塔の攻略を目指して他の街から訪れたと言う設定があるからだ。

それはそれとして……空間魔法？　アイテムボックスの事を言ってるみたいだけど……

まあ、それを否定する必要はない。俺は「ええ、まあ」と曖昧に頷いておき、中から銀貨5枚が出て来る様に念じて手を突っ込む。

手に何か触れた感触を覚え取り出すと、期待通り銀貨5枚が俺の手に握られていた。

ついでにポケットにしまっておいた銅貨をアイテムボックスに戻

しておく。

「これでお願いします」

アイテムボックスをしまい、おばちゃんに銀貨5枚を手渡す。

「はいよ。詳しい説明はいるかい？」

「後ででも良いですか？　とりあえず荷物を整理したいので」

俺から銀貨5枚を受け取ったおばちゃんが、ここに来て初めて浮かべた笑顔をまあすっぱり気にせずに俺はそう答えた。

「構わないよ。それじゃあ、これが部屋の鍵ね。2階の一番奥の部屋さ」

「ありがとうございます」

俺はおばちゃんから鍵を受け取り、横目に見えていた階段を上る。そう言えば、入り口も建物の左側にあったし、階段もそうだ。とりあえず2階が宿の部屋なんだろうと判断し、俺は言われた通り一番奥の部屋まで進んだ。

荷物整理

部屋に入った俺は、とりあえず鍵を閉めると再びアイテムボックスを出す。

持っている物を確認する為にスタータス画面を開き、所持品の項目を探る。

消耗品の類いには回復アイテムがいくつかある程度で、特に珍しい物はない。分かってはいたけどちょっとがっかりだ。

装備品は、メイン装備が壊れてしまった時の為に用意した予備の装備が一式ある。売ればそれなりの値にはなるはずだ。

タワーオブバベルの世界において、装備品は一度手に入れれば永久的に使える代物ではない。消耗品の中にも何度か使用出来る物があるが、装備品も磨耗していきいつかは壊れる。修理すると言う手段もあるし、同じ物を揃えると言う手もある。

そう言えば今の装備品ってどうなってるんだろうか？

ステータス画面で確認すると、きちんと装備の欄があった。

武器：エルーザナイフ
防具：ガーランドの闇法衣
装飾品１：シリビアンのピアス
装飾品２：竜皮の靴

項目はゲーム内の仕様と同じだ。防具は鎧の類いを指し、他の部位に着ける装備は全て装飾品扱いとなる。その装備可能数は通常は二つ。ジョブによってはその数が増えるらしい。

因みに今の俺は靴を装備してるけど、装飾品に靴を装備しなくてもきちんと靴は履いてる事になってる。けど、ゲームとは違う今となってはどうなるんだろうか。

そう言えば、俺のジョブはどうなってるんだ？

今度はジョブの欄を見る。

職業（ジョブ）・創造主（クリエイター）【レベル５０】

ジョブの最高レベルは５０だから、こちらもカンスト状態だ。クリア直前にはジョブレベルは４９だったから、これも最後の戦闘で上がった様だ。

クリエイターは非戦闘職と呼ばれる種の職業だが、隠し上級職の一つで、この系統では最高職でもある。

スキルの確認はまたにするとして、当初の目的を果たさないとな。

所持品のリストを見ながら、アイテムボックスから取り出して行く。

「回復アイテムって飲み物タイプだったんだ」

問題は味と効果だ。ステータスにＨＰ等の項目がない以上、具体的な効果を確かめる事が出来ない。

何よりももったいない。

検証は大事だと思うけど……

今はまず生活を安定させる事の方が大事だ。

一度出したアイテムと腰に提げていたエルーザナイフをアイテムボックスにしまい、そのままアイテムボックスを閉じる。

ステータス画面を見ると武器の欄がなしと表記されている。

「さてさて。確か宿についての詳しい説明があるって言ってたな」

しばらくはここにやっかいになるんだ。諸注意があるなら聞いておかないとまずいだろう。

後で聞くって言っちゃったしな。

まだまだ確認したい事はあるが、とりあえず腰を落ち着かせられ

るくらいには自分の中でも整理が出来たと思う。
そう判断して、部屋を出て1階に向かった。

「おや、早かったね」

階段を降りると、最初に出迎えた時とは違い営業スマイル？　を浮かべたおばちゃんにそう迎えられた。

「そうですか？　まあ、最低限の整理しかしてませんからね」
「そうかい。ともあれ、この宿について説明するかい？」
「はい。お願いします」

俺がそう答えると、おばちゃんはどことなく気を良くした調子で饒舌に説明を始めた。
微妙に話が逸れたりしながら十分くらいかかったその説明によると、宿側は基本的に客の生活には不干渉。客同士のいざこざがあった場合も、宿に迷惑がかからなければ仲裁にも入らない。
朝食に関しては朝１０時までにカウンターで食べる事を伝えなければその日は貰えないとの事。例え朝食を抜いたとしてもその分の返金はなし。因みに朝食の開始は朝６時。メニューはその日毎に宿側で決めるらしい。
１階にある食堂はレストランにもなっており、代金さえ払えば別途注文する事が出来る。レストランは宿泊客以外にも開放されているが、特に宿泊客にサービスがある訳ではない。
トイレや浴場は各部屋にはなく、１階の共同トイレと共同浴場を利用する他ない。とは言え温泉の様な大きな浴場ではなく、一人一人利用するのが精一杯な一般家庭のお風呂みたいなものだ。トイレも風呂も男女で別に用意はされている。
浴場を利用する際は入り口に用意された使用中の札を扉にかけ、きちんと鍵を閉める事。まあ当然だ。

ついでに言えば1階にはトイレ、浴場、食堂の他におばちゃんやコックをしているおばちゃんの旦那さんの部屋がある。2階の部屋は全て宿部屋で、廊下を挟んで5部屋ずつの計１０部屋。最初に感じた宿屋の全体像より大きい建物みたいだ。

今度から目算で物を言うのは控えよう。

「分かったかい？」

「大丈夫だと思います」

後は普通に旅館とかホテルに泊まる時の諸注意みたいなものを言われた。

しばらくは関係ないけど、一応宿のチェックアウトは正午までとなっている。正午を過ぎたら一日分多く代金を請求されると。気を付けないとな。

そんな風に考えていると、階段から誰かが降りて来る足音が聞こえてきた。

月日時は大事です

降りて来たのは、一言で言えば美人だった。
二言で言えば、綺麗で美人だった。
腰近くまで伸ばした金色の髪は毛先まで手入れされている（だろうと思う）。
目元はややキツイ感じがするが、キリッとしたその顔付きは端整な顔立ちを強調している。
動き易さに重点を置いたであろう金属製の軽鎧を身に纏い、腰には一本の長剣を差している。見た目は完全に剣士職だが、詳細は判断出来ない。
良く見れば瞳の色が藍色だ。珍しいと言うか、流石はファンタジー世界と言った所か。

「ライムちゃん、もう出かけるのかい？」
「はい。今日は少し上まで行ってみようと思いまして」

おばちゃんにライムと呼ばれた美人さんが、堅苦しい口調でそう答えた。
今の会話から察するに、ライムちゃんはこれから塔に向かうのだろう。

「気を付けるんだよ」
「はい。ありがとうございます」

おばちゃんの意外と？　気さくな言葉に、ライムちゃんは几帳面にお礼を言ったかと思うと、またまた几帳面にも「行ってきます」と行って宿を出て行った。
俺の方には見向きもしなかったのはちょっと哀しいものがあるが、

まあ仕方ないだろう。
と言うか、思ったより客に対して不干渉じゃない気がしないでもない。別に良いんだけどね。

「今のは？」
「個人情報は教えられないよ」
「そりゃあそうでしょうけど。さっき名前呼んでましたよ」
「……名前くらい問題ないさ」

割と適当な感じなのね。

「そう言えば、宿帳に記名とかしなくて良いんですか？」
「そう言う宿もあるけど、うちでは必要ないよ。そんなにたくさんの客がいる訳じゃないしね。ワタシが顔を覚えていれば良いだけさ」

他に従業員はいないのだろうか？　まあ、細かい事は気にしなくて良いか。

「そう言えばついでにもう一つ。さっきの説明で門限の話が出なかったんですけど、出入りは常に自由なんですか？」
「そうさね。宿の出入り口には鍵もないし、基本的に出入りは自由だよ。勿論、ある程度常識の範囲で行動はして貰いたいけどね」

なるほど。塔を攻略中、いつ失敗して外に飛ばされるか分からない以上ある程度は融通を利かせてくれる様だ。

「分かりました。気を付けます」
「そうしておくれ」

と、お互い苦笑を浮かべる。

あれ？　そう言えばさっきもう出かけるとか言ってたな。

「今って何時なんですか？」

「まだ9時前だよ。そこに時計があるだろう」

おばちゃんがそう言いながらカウンターの壁、ちょっと上の方を指差した。

確かに、アナログな壁時計が掛けられている。

８時４０分か……

あ。そう言えばステータス画面に時計機能があったよな。そう思い出し、ステータス画面を開く。

右下の方にきちんと時計が付いてる。こっちはデジタルだ。

８時４０分３５秒。って見てる間に秒数は経過していくけど。

まあ、これなら時間に困る事はない。

待てよ。そう言えば今日はいつなんだ？　俺がゲームをしていたのは冬だが、ゲーム内では確か春だった気がする。

「今日って何日でしたっけ？」

「もうボケが始まってるのかい？」

なんて笑って言うおばちゃん。冗談の様だ。これで月まで聞いたら本当にボケてると思われそうだ。いや、でもおばちゃんの冗談を利用すれば聞けそうだな。

「そうなんですよ。実は今が何月何日か分からなくて……教えて下さい」

と、冗談っぽく言う。

おばちゃんは一瞬驚いた様な表情を浮かべたが、直ぐに俺の悪ノリだと思ったらしくきちんと答えてくれる。流されなくて良かった。

「しょうがないねぇ。今は初桜(はつざくら)の月の１０日だよ」

初桜の月か。やっぱりゲームをプレイしてた状況とほぼ一緒みたいだ。

因みに、タワーオブバベルの世界にも四季はあった。月でしっかりと分けられていたけど、流石に今は多少のズレがあるかもしれない。

初桜の月は春の一月目。次が桜花(おうか)の月、内桜(うちざくら)の月、桜終(おうつい)の月と春が続く。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。それで、あんたはこれからどうするんだい？」

「少しこの辺りを見て回ります。この辺には詳しくないので」

嘘だけど。

「そうかい。気を付けるんだよ」

「はい」

気を付ける事なんてあるのか？　まあいいや。

「それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

おばちゃんに見送られて、俺は燕尾荘を後にした。

運命の（？）出会い

ゲームのタワーオブバベルにおいて、最も簡単にお金を稼ぐ方法は塔に入る事だ。

各階に設定された乱数に基づいて、定期的に宝箱が出現するってのもあるし、何よりもモンスターを倒せばそれだけでお金が手に入るからだ。狩りゲーとは違うのだよ。

とまあそれは良いとして。

それが簡単な方法と言うだけで、他にもお金を稼ぐ方法はある。と言うか、塔を攻略する以外のプレイスタイルとして色々なシステムがあると言った方が正しいかもしれない。

と言ってもその殆どが商売関連だ。専用のスキルが必要になる事が多く、生産に重きを置いて商品を卸したり、逆に生産スキルを持つ者から商品を買い取って販売を行なったりする者が多かった。勿論その両方を行なう者もいた。

そして、俺が塔攻略の他に唯一手を着けていたシステムが農場運営。

その農場システムの有無を――と言うより、俺が資金を注ぎ込んだ農場の存在を確かめるべく、それがあるはずの場所へと向かった。が。

目的地に辿り着いた俺は絶望する他なかった。

「新地かよ……」

いや待て。もしかしたらちょっと違う所にあるかもしれない。

見渡せば畑とかはちゃんとあるし、この場所は農村街だ。

「すいませーん」

俺は近くを歩いていた男の人に声をかけた。
クロウ農場（安易なネーミングでスミマセンね）があるかどうかを聞いたが、知らないと答えられた。その後何人かに聞いてみたが、やはり知らないと言う。
農場について特に関心がないだけかとも思ったけど、どうやらそう言う訳ではないらしい。
そもそも、農場の前にはきちんと看板が立てられている。

「一からやり直しか……？　いや、いっその事農場から手を引くべきか……」

だとすると、燕尾荘に泊まっているのは不便だ。とは言え、二ヶ月は宿泊が決まってる。
まあ、新しく農場を始めるとなるとそれなりに資金が必要になる訳だしな。二ヶ月の間に資金を増やしながらこの先どうするか考えるとするか。

「あのぅ」

一応、農場以外の事を始める事も視野に入れておくとしよう。

「すみません」

他にどんなシステムがあったかなぁ……

「ちょっと良いですか？」

道具屋とかあったな。と言うか商売系か。他には……

「すみません！」

「うわ！　え？　あ、はい？」

後ろの方で小さくなんか聞こえると思ってたけど、急に大きな声がしてびっくりした。

振り返ると、そこには女の子が一人立っていた。

はっきり言って小さい。しかし出る所がこれでもかってくらい出てる。

これは童顔なんちゃらと言う娘っ子ではないか！　顔も可愛らしいし、早熟な子供じゃなければ直ぐにでも手を出したいくらいだ。

……あれ？　俺ってこんなナンパなキャラだったっけ？

少なくとも、日本にいた頃はナンパなんてした事ないし、どちらかと言えば女の子は苦手だったはずだけど……

まあいいか。

「農場に、興味があるんですか？」

聞こえない事はないくらいの小さな声で、目の前の少女はそう聞いてきた。

「何で？」

「農場、探してるみたいだったから……」

弱々しい声音で答える少女。何か俺がいじめてるみたいに思えてきた。

いやいや。そんな訳ないし。

「あると言えばあるかな」

状況によっては諦める事も考えていたとは言え、何となく性に合ってるとは思っている。

「もし良かったら、ウチの農場を助けて貰えませんか？」
「は？」
今までで一番はっきりとした口調で、その少女の口から信じられない言葉が出て来た。
「詳しい話、聞かせてくれる？」
俺のそんな言葉に、少女はしっかりと首を縦に振った。

野菜農家の悩み

詳しい話は少女の家で聞く事になった。
道すがらお互いに自己紹介を終え、少女の名前がミルクだと分かった。
そう言えば、女の子は食べ物とか系の名前の方が多かったなと思い出す。
案内されたのは農村街では珍しくない木製の一軒家。とは言っても小さめの家で、一階建てだ。しかし奥には畑が見える。

「誰もいないみたいだね」

迎えられるままに家の中に入ると、中からは人の気配がしなかった。

「……はい」

と頷く様子は、本当に子供みたいに見える。まあ、どちらにせよ年下である事に変わりはないんだけどさ。
いやいやそう言う事じゃなく。頷くミルクちゃんの様子はやけにしんみりとしたものだった。これは地雷踏んだか？

「父さんは、今中心街に行ってるから」

母さんは……とは続かない。やっぱり地雷だったみたいだ。
これ以上こっちから振るのは止めておこう。

「それで、助けて欲しいって話だけど？」

リビングと思しき部屋へ通され、促されるままにイスに座った俺は、早速本題に入る事にした。

「はい。ウチは野菜を作っているんですけど、ある日それが全然売れなくなって……」

まあ、当然暗い話だよねー。

「味も品質も落としてなんていないのに……それで、父さんが色々調べたんです。そしたら、中心街ですごく安く野菜が売られてて……」

「そのせいで売れなくなったと。その安い野菜の味とかはどうなの？」

そこ大事よ。

「不味くはなかったです。でも、ウチの野菜の方が絶対に美味しいです」

ちょっとだけ熱く語るミルクちゃん。よっぽど自分の所の野菜に自信があるのか、ただの愛着か……

「それって、最近の話？」

「はい。先月の頭から売れなくなって、一週間くらいでおかしいなって思い始めたんです」

「それで調べてみた訳だ」

「はい」

なるほどね。まあ、どこの世界でも基本的に安い物は人気があるって訳だ。

「それで、お父さんは今日も原因を調べに行ってるのかい？」
「えっと、そうじゃないんです」
「どう言う事？」
「今は市場の人と揉めてる状況なんです。出来る限り今までの値段で買い取って貰える様に、交渉に行ってるんです」
「それで今日も交渉って訳だ」
「はい」

市場側にしたって、利益を出せないんじゃあ意味がない訳で……そうそう上手く行くとは思えないな。

「それで、具体的に俺に何をして欲しいのかな？」

それを聞かない事には、ミルクちゃんの事情を聞いた所でどうしようもない。

「父さんを手伝って欲しいんです。父さん、野菜作りしか興味のない人だから、中心街の人と交渉なんて上手く行くはずないんです」

何だ。ミルクちゃんも意外と現実を理解してるじゃないか。

「可愛い子の頼みだし、手伝ってあげても良いけど……」

俺の可愛い発言に、ミルクちゃんは頬を紅く染める。初々しいねぇ。

「俺は善人って訳じゃないから、報酬は貰うよ？　労働には対価を。これ世の中の基本だからね」
「分かって、ます」

まあ、商売をしてる家の娘だ。それくらい理解はしてるだろう。
「それで、俺は何を貰えるのかな？」
「畑の一部を、無料で貸します」
なるほど。それで興味があるか聞いたのか。
「お父さんの許可、貰ってないよね？」
「大丈夫です。わたしが、自分で買った土地があるんです」
ほー。まだ若いのに大したもんだ。って、これじゃあ俺が年寄りみたいだな……
「小さいですけど、一応畑をやろうと思って買った土地なので……」
「分かった」
語尾が小さくなったミルクちゃんの言葉に繋ぎ、俺ははっきりとそう答えた。
「報酬はそれで良いよ」
普通なら失敗したとしても何らかの補償はして貰うものだが、それを口に出すのは野暮ってもんだろう。
「ただ、俺は俺で動かさせて貰うよ」
「え？」
「君のお父さんと一緒には行動しない。多分、その方が上手く行くと思うし」

俺の言葉が信じられなかったのか、きょとんとしているミルクちゃんにそう告げる。
少し考えた様子だったミルクちゃんだったが、納得したのかしっかりと頷いた。

「分かりました。方法はお任せします」
「よし。それじゃあ契約成立だ。悪いけど、行動に移すのは明日からで良いかな？」
「はい。でも、出来るだけ速くお願いします」
「分かってるよ」

ミルクちゃんからすれば生活がかかってるもんな。

「それじゃあ、良い結果を期待してて」
「はい！　ありがとうございます！」

嬉しそうに頷き、ミルクちゃんは深々と頭を下げた。
俺は「じゃあね」とだけ言葉を残し、ミルクちゃんの家を後にした。

モナカとの再会

さてさて。これが初クエストと言う事になるのかな。
クエストとは、冒険者が依頼を受けて報酬を貰う為のシステムだ。
内容を考えれば交渉系のクエストだろう。けど、どうにもきな臭い。荒事になりそうな予感がする。となると、今の俺がどの程度戦えるのか知っておく必要がある。
レベルは高いが、ステータスは不明。装備はしっかりとあるものの、それを使いこなせるかどうかは別問題。
今更だけど言っておくと、身体は間違いなく俺――水原　悠人の物だ。自慢じゃないが運動は決して得意ではない。苦手でもないけど。
いざって時の為にスキルの確認も踏まえて、身体を動かせる場所があると良いんだけど……
どこか良い所はないかなー。と考えながら歩いていると、前から見覚えのある人物が歩いてきた。

「あ」

と声を上げたのは相手の方だ。どうやら向こうも気が付いたらしい。
トタトタと小走りで俺に近寄って来たのは、今朝方俺を介抱してくれたモナカだ。

「クロウさん……でしたよね？　燕尾荘の場所、分かりました？」
「ああ。表に出たら直ぐに見えたしね。でも、ありがとう。助かったよ」
「どういたしまして」

俺の言葉に、笑顔を浮かべるモナカ。
うん。和む。

「それで、こんな所でどうしたの？」

自分の事は棚に上げて、特に何をしている訳でもなさそうなモナカにそう尋ねた。するとモナカは苦笑を浮かべ、ゆっくりと口を開く。

「うち、農場を経営してるんです。でも、最近ちょっと上手くいってなくて……」

はいイベント来た！
と言うか、そんな事簡単に他人に教えても良いのかね。しかも会って間もない様な相手に。と思わないでもない。

「もしかして、野菜が売れなくなってるとかそう言う話？」
「何か知ってるんですか！？」

俺の言葉に、モナカは異様なまでに食いついてきた。
どうやら、モナカの家も野菜関係の農家みたいだな。

「知ってるって言う程じゃないよ。ただ、さっき他の農場から依頼を受けてね」

と、ここは正直に話しておく。だって、モナカの様子がちょっと怖いんだもの。いや、見た目は相変わらず可愛いけどさ。

「そうですか……やっぱり、どこも打撃を受けてるんですね。でも、依頼を受けたった言う事はもしかして……」

モナカがそう言いながら、期待を込めた視線を向けてきた。
「一応、解決に向けて動くつもりではいるよ。どこまで出来るかは分からないけど」
「そうなんですか……でも、ありがとうございます！」
「まだお礼を言われる様な事はしてないよ。出来るとも限らないし」
「いいえ。例え結果が出なかったとしても、私達農家の為に動いてくれたって言う事が、私達にとってはありがたい事ですから」

真摯な表情で、モナカはそんな風に語る。
まあ、可愛い子に良く思われるのは悪い気がしない。

「そう？　まあ、全力は尽くすよ」
「お願いします」

そう言って頭を下げるモナカ。彼女に依頼された訳でもないのに……
よっぽど困ってるんだろうな。

「ところでさ、この辺に身体を動かせる場所ってないかな？　出来ればあんまり目立ちたくないんだけど」
「それなら、うちの畑なんかどうですか？」
「え？　良いの？」
「はい。収穫後で今は何も植えてない畑がありますから」
「それはありがたいけど、もしかしたら結構荒れるかもしれないよ？」
「大丈夫ですよ。新しく種植えする時は一度均しますから」
「そっか。なら、ちょっと場所を借りようかな」
「はい。うちはこっちです」

モナカのそんな厚意で、俺は案内されるままにモナカの家に向かう事になった。

能力確認

結論から言おう。モナカの家には寄らなかった。
と言うか、使っても良いって畑は家から少しだけ離れた所にあった訳だ。
と言っても目と鼻の先だけど。
モナカの家はミルクちゃんちよりも規模が大きい農場らしく、案内された畑もそれなりに広いし、同じ規模の畑が後二つあるそうだ。
それはさておき。
まずは軽く身体を動かしてみる。
柔軟をしてから、畑をぐるっと一周走る。二周目は少しペースを上げる。三周目は緩急をつける。
三周走り終えた所で一度足を止める。
本来の俺なら、もう息が上がってて当然の運動をした。にも関わらず、今の俺はまだまだ元気だ。
数値化されていないだけで、ゲームのステータスが反映されているのかもしれない。
体力面はこれで問題ない事が分かった。次は武器を使えるかどうかかな。

「Ｆ４」

俺がそう言葉を発すると、俺の身体が光の粒子に包まれた。それは一瞬の事で、光が止むと俺の手には一振りのナイフが握られていた。
Ｆ４はメイン武器と予備武器の入れ替えコマンド。装備の変更は戦闘中に行なう事もある為、単語のみで起動する様にしてある。

「Ｆ５、Ｆ６」

続いて防具と装飾品も変更してみる。
武器の時と同じ様に身体が光の粒子に包まれ、それが明けると装備が変わっていた。
一応ステータス画面を開いて確認してみる。

武器：雷神の短刀
防具：暴風竜の法衣
装飾品１：神秘の勾玉
装飾品２：竜皮の靴

よしよし。問題なく装備は交換されている。
Ｆ５が防具の交換。Ｆ６が装飾品１の交換だ。装飾品のショートカット交換は１しか登録出来ない仕様な為、他は手作業で変えるしか手はない。
さてさて。じゃあナイフを振ってみるかな。
と、適当に素振りをしてみる。

「何となく手に馴染む感じはあるかなぁ」

ナイフを振る事に違和感がない。振れば振るほど、ナイフを使いこなせる気がしてくる。
斧とか重い武器って訳でもないから、それなりに使えてもおかしくはない。けど、それ以上に今まで何度も振るってきたかの様な感覚がある。

「大丈夫だと思っておこう」

と自分に言い聞かせる。
次はスキルだ。それなりに数があるから、いくつか確認しておけ

ば他のも使えるだろう。

「ストーンウォール」

俺がスキル名を声に発すると、俺が思い描いた通り目の前に石の壁が現われた。

強度はどんなものかと、ナイフで斬りかかる。

雷神の短刀は魔力を秘めた逸品だが、石の壁を僅かに削る程度しか出来なかった。刀身に傷が入らなかったのは流石と言うべきか……

「エレメントシュート」

石の壁から少し離れて、今度は攻撃用のスキルを発動する。

前に突き出した俺の手から放たれた七色の光を放つ球状の物体。タワーオブバベルの世界において存在する七つの属性全てを混ぜ合わせた弾丸を放つそのスキルが衝突し、石の壁は被弾部分が粉々に砕け散った。

「基本的にエフェクトはゲーム内と同じみたいだな」

それにきちんとスキルも発動する。これなら、大概の荒事にも対応出来そうだ。

「後は、支援系のスキルも試しておくかな」

こうして、しばらくスキルの確認に時間を費やす事になった……

天地創造

クリエイターが覚えるスキルは、実を言えば一つしかない。
そのスキル名は天地創造。タワーオブバベルの世界では、ジョブ毎に使用出来るスキルが決まっており、ジョブを変えれば一度覚えたスキルでも使用不可になる事も多々ある。それでもまた元のジョブに戻れば使える様になる為、ジョブチェンジをマイナスと捉えるプレイヤーは皆無と言っても過言ではなかった。
とは言え、上級職の方がより優れた恩恵を受けられる為、例え便利なスキルが使えなくなるとしても上級職を目指す者は多かった。
しかしだ。俺の現在のジョブであるクリエイターは、言ってしまえば最低人気のジョブだ。流石に初期状態と比べれば上だが、少なくとも最上級職としては最低人気。上級職と言われるジョブの中でも最低人気だった。
ジョブ条件を解放しているプレイヤーは数多くいたが、クリエイターのレベルを上げているプレイヤーは、俺の他には二人しか見た事がない。それ程の不人気。
それには当然理由がある。
まず第一に、ステータスへの恩恵が皆無と言う点。マイナス補正も一切ないが、プラスの補正も一切ない。最上級職ともなれば、かなりのステータス上昇が見込めるのが普通だ。しかし、それがない。
第二に、使用可能スキルが専用スキルである天地創造のみと言う点。しかもこのスキルが超がいくつも付く様な特殊スキルだ。
スキル天地創造。それは、自分が今までに覚えたスキルを合成し、新たなスキルを生み出すスキル。当然、データ上存在する範囲でしかスキルを作成する事は出来ないが、他のジョブでは覚える事の出来ない特殊なスキルを生み出す事が可能だ。
この天地創造で生み出したスキルは、天地創造を使用した形式と見なし使用する事が出来る。

が。問題はクリエイターのジョブ解放条件だ。上級職である召喚（サモ）師（ナー）と、錬金術師（アルケミスト）のレベルをマックスまで上げる事。それがジョブ解放条件。これだけでもかなりの労力を必要とする訳だが、最低条件を満たした程度ではクリエイターの真価は発揮出来ない。なぜなら、条件であるどちらかのジョブのままの方が強いからだ。

クリエイターの真価。それは天地創造の条件だ。今までに覚えたスキルを合成する――つまり、多くのジョブを極めれば極める程その幅が広がっていく事になる。

因みにだ。タワーオブバベルにジョブは全部で１０８個あると言われている。条件の分かっていない隠しジョブもまだ存在していて、現在確認されているのは９０個。類似職等で重複するスキルがあるとは言え、その全てを覚えようとすれば異様な程に時間と労力が必要になる。

それなら、一系統のジョブを極めていった方が余程楽と言う話だ。

それでも俺はクリエイターとして強くなる事を選んだ。だって、天地創造で生み出したスキルには、そのプレイヤーが名前を付ける事が出来るんだぜ。何て素晴らしい！

結局、殆ど安直な名前しか付けてないけど……

自分が名前でどんなスキルが判断出来ないと意味ないしね。

「ありがとう。助かったよ」

一度モナカの家に顔を出して、玄関先で俺は頭を下げた。

「いえいえ。力になれて良かったです」

そう答えて笑顔を浮かべるモナカ。

うん。癒される。

「もしかしたらまた場所を借りに来るかもしれないけど、その時は

よろしく」
「種植え前だったら良いですよ」
と、今度は苦笑を浮かべる。
「うん。それじゃあね」
「はい。さようなら」
笑顔で手を振るモナカに見送られながら、俺は燕尾荘へと向かった。

1日目の終わり

燕尾荘に着く頃には、既に日が沈み始めていた。
日没早くね？　と思わないでもないが、何だかんだでスキル確認には結構時間食ったからなぁ。
そう言えば昼飯食べてないな。食堂でなんか食べるか……
なんて考えながら燕尾荘の扉を開くと、カウンター越しにおばちゃんと話をしている見目麗しい女性の姿が！
って、あれは確か今朝すれ違った……

「ライムちゃん！」

あ。しまった……
思わず思い出した嬉しさで大声で呼んじゃったよ……
名前を呼ばれたライムちゃんが、訝しげな視線をこちらに向けてきた。そりゃあそうだよねー。

「誰だ貴様？　何故私の名を知っている？」

視線だけで人が殺せるなら、おそらく俺は既に殺されているだろう。ってくらい冷たくも厳しい視線を向けながらそんな言葉を放つライムちゃん。
って言うか、おばちゃんがライムちゃんって呼んでたからそのまま定着する所だった。そうだな……

「失礼。ライム嬢。俺はクロウ。今朝ここですれ違ったんだけど覚えてない？」

一瞬だけキリッと表情を引き締める俺。でも直ぐに素に戻る。

ライム嬢は少しだけ考えた素振りを見せ、どうやら直ぐに思い出した様だ。

「誰かがいたのは覚えているが、顔までは覚えていないな」

「ライムちゃん。坊やが言ってるのは本当だよ」

あれー？　俺いつから坊や呼ばわりされてるんだろう？　まあいいけどさ。

「この子も客さ。出来る限り仲良くしてやんな」

「興味ないな。とりあえず、今後は気安く名を呼ばないで貰おうか」

おう。超クール！　でもそんな所も凛々しくて可愛いぜ！

「俺は仲良くしたいと思ってるんだけどな」

「……失礼する」

もうこれ以上何も言う事はないと言わんばかりに、ライム嬢は階段を上って行ってしまった。

あーあ、残念。

「振られたみたいだね」

と、おばちゃんがどこか嬉しそうに声をかけてきた。

「まあ、少しずつ仲良くなっていきますよ」

「なかなか根性があるみたいだね。まあ、あの子も長くここに泊まる予定だから、精々頑張りな」

「ははは――ありがとうございます」

思わず乾いた笑いをしてしまった。

「それはそうと、食堂開いてますよね？」

「当然開いてるよ。夜は２２時までやってるよ」

そうだったのか。覚えておこう。

「ありがとうございます」

「うちで食べてくれるんなら、こっちとしてはありがたいからね。たんとお食べよ」

「頑張ります」

苦笑を浮かべながらそう答えて、俺は食堂へと入った。

燕尾荘の食堂は食券を先に買うタイプらしい。

肉が食べたい年頃な俺は、牛ステーキ定食４ウォールを頼む事にした。

番号札を渡され、呼ばれたら自分で取りに行く形式だった。

牛ステーキ定食はボリュームも味も満足出来る内容で、一泊朝食付きの半分に近い値だが納得出来た。これなら明日の朝食も期待出来るそうだ。

食器も返却口に自分で持って行かなければならなかったが、それくらいは全く問題ない。

ごちそうさま。と声をかけ、俺は食堂を後にした。

カウンター越しにおばちゃんと挨拶を交わして自分の部屋へ戻る。

今日は色々あった。いや、マジで。

今更ながらどっと疲労感が襲って来た。

汚れた身体は備え付けのタオルで拭くくらいに留めて、またまた備え付けの寝巻きに着替えた俺はそのままベッドに倒れ込んだ。

シャワーは明日の朝浴びる事にしよう。

そう決めた次の瞬間には、大きな睡魔が襲ってきた。

「夢オチとか、ちょっと期待しておこうかな……」

そんな呟きを漏らし、俺はそのまま眠りに着いた……

今後の方針

目を覚ますと、見慣れない天井が目に入ってきた。
なんてテンプレのセリフを思い浮かべて、自分の置かれた状況を思い出す。

「……はぁ……」

思わず深く溜息を吐いた。
普通なら考えられない出来事に直面している現状を改めて認識し、気分が滅入る。憂鬱な気分になっているのは確かだけど、不思議と取り乱す程の不安感は覚えていない。
女の子への対応なんかも考えると、まるで思考の一部が変革してしまったかの様だ。
身体を起こして、身支度を整えながら今後の事を考える。
帰りたい――
不思議とそんな欲求も湧いてこない。とは言え、このままここで生活していけるのかも分からない。家族や友人の事を考えれば、帰れるなら帰った方が良いに決まってる。ならその為の方法は……？
考えられるのは、もう一度塔を攻略する事だ。この世界にある塔の最上階にも神がいるというのなら、元の世界へ帰らせてくれるかもしれない。手がかりがそれしかない以上、塔の攻略を志すべきだろう。
とは言え、現状で攻略出来る確率は低そうだ。となると、やっぱり生活の基盤を整えた上で装備やアイテムを揃える必要がある。
依頼として受けた事だし、まずはミルクちゃんからの依頼をこなす事を考えよう。
当面の方向性が決まる頃には一通りの身支度が整え終わり、部屋を出て1階に降りる。

「おはよう」
「おはようございます」
おばちゃんに声をかけられ、俺は素直に挨拶を返した。
「朝ご飯、食べるかい？」
「はい」
最初は無愛想な人だと思ったが、客になった瞬間から随分愛想が良くなったよな。と改めて思う。
「はいよ」
俺が頷くと、おばちゃんがカウンターの下からプラスチックっぽい赤い札を取り出してカウンターに置いた。
「食券の代わりですか？」
そう言いながら札を手に取る。
「そうだよ」
「分かりました。因みに、今日のメニューはなんですか？」
「焼き鮭定食だよ」
これはまたオーソドックスなメニューだな。全く問題ないけどね！
「そう言えば、今お風呂って空いてます？」
「空いてるはずだよ」
「分かりました。じゃあ、先にお風呂に行って来ます」

「構わないけど、札は失くさない様にね」
「気を付けます」

おばちゃんの言葉に苦笑で返し、俺は浴場へと向かった。
浴場と称しているだけあって、思ったよりは広かった。二人くらいなら入れるんじゃないか？
まあそれはそれとして。朝食も待ってる事だし、元から長々と風呂に浸かるタイプじゃない。さくっとシャワーだけ浴びて風呂を出る。
続いて食堂へ向かい、赤い札を渡す。
少し待たされ、聞いていた通り焼き鮭がメインの定食を受け取った。
ファミレスとかの朝の膳みたいな感じだけど、味はそれ以上だ。
燕尾荘の食堂、侮れないな！

「あ、そうだ」

メニューに野菜が入っていた事で、市場調査の一環を思い付いた。
食べ終えてトレーを返却口に出すついでに、厨房にいる人間に声をかける。

「すいませーん」
「何か？」

声を返してきたのは、まだ若いあんちゃんだった。
宿はおばちゃん一人で切り盛りしてるみたいだけど、流石にレストランとなるとオヤジさん一人ではない。それは昨晩に分かってたけどさ。

「仕入れについて聞きたい事があるんですけど」

「そういった事には答えられませんよ」

まあそれもそうか。だけどまだ諦めるには早い。

「野菜の仕入れ先だけでも教えて貰えませんか？　農業に興味があるんです」

「うーん……オヤっさん、野菜の仕入れ先が知りたいって言うんですけど、教えても大丈夫ですか？」

喰らい着く俺がそう簡単には諦めないと思ったのか、あんちゃんは奥にいるオヤジさんにそんな質問を投げかけた。

「駄目だ」

「ですよねー。と言う訳で、やっぱり教えられません」

俺は負けない！

「分かりました。じゃあこれだけ教えて下さい」

分かったと言う俺の言葉に、一瞬安堵の表情を浮かべたあんちゃんだったが、そうは問屋が卸さないぜ。

「どこかの農家から直接仕入れてますか？」

これが大事だ。もしそうなら、燕尾荘は今回の件とはまず関係ないだろう。そうじゃないなら、もっと色々探らないといけないかもしれない。

「まあ、それくらいなら……そうですよ。農村街一の味と品質を誇る農家から直接仕入れてます」

そこまで言ったら、場所も特定出来るんじゃ？　と思わないでもないが、情報をくれたあんちゃんには心の中で感謝しておこう。

「そうですか。ありがとうございました」

外面的にもきちんと礼を言い、ご馳走様でしたと言う言葉と共に食堂を後にした。

最初の一歩

食堂を後にした俺は、おばちゃんに一言出かける旨を伝えて燕尾荘を出た。

この時点で時刻は朝の9時だ。寝た時間が早かった割には起きたのは遅い。何だかんだで疲れてたんだろう。

とりあえずは確認したい事があるから、ミルクちゃんの家に向かう事にする。

道は覚えてるし、大した距離でもない為直ぐに目的地に着いた。

玄関の扉をノックすると、中からミルクちゃんが顔を出した。

「クロウさん。おはようございます」

「おはよう」

俺の顔を見て少しだけ驚いた顔を浮かべたミルクちゃんだったが、直ぐに笑顔で挨拶をしてきた。勿論俺も笑顔で返事をしたさ。

「どうかしたんですか？」

「ちょっと聞きたい事があってね」

ミルクちゃんが把握してれば良いんだけど……

「お父さん、まだいる？」

「すみません。もう中心街に向かいました」

「いや、良いんだ。どっちかって言うとミルクちゃんから話を聞きたいし。知ってればだけどね」

「分かりました。わたしが分かる事でしたら何でもお答えします」

「ＯＫ。えっと、上がっても良いかな？」

俺は別にここで話しても良いんだけどね。一応込み入った話をする訳だし。

「あっ。えっと、すみません。どうぞ」

慌てた様子でそう答えて、俺を家の中へと促すミルクちゃん。
しっかり者の様に見えて意外とドジッ娘か！

「お邪魔します」

昨日も入ったリビングに通され、俺は昨日と同じ木製のイスに座った。

「今お茶淹れますね」
「お構いなく」

礼儀としてそう答えたものの、実は水分を欲していたりする。まあなくても平気だけどね。
ミルクちゃんはそれでもお茶を用意してくれた。あ、ちゃんと昨日も貰ったぞ。ミルクちゃんの名誉の為に言っておく！
ミルクちゃんが用意してくれた冷たいお茶を一口飲み、俺は早速本題に入る。

「ミルクちゃんとこは、近隣に直接野菜を販売したりしてる？」
「いいえ。うちはそんなに大きくないですから、生産量的に全部市場に卸してます」
「昨日聞きそびれたんだけど、売れなくなったってのは市場から？
それとも、市場が買い取ってくれなくなった？」
「最初は、単純に市場での売れ行きが落ちたんです。だから、市場側も最初はうちに安く売る様に言ってきたらしいです」

「それで、お父さんは市場の人と揉めてる状況な訳だ」
「はい。わたしが聞いてる限りはそうです」
実際にはまだ、根本的な原因となる相手が分かってないのか……
「こんな事聞くべきじゃないかもしれないけど、この辺りで一番の農家って言ったらどこかな？」
「そうですね……うちが一番って言いたいですけど、やっぱりバトンさんの所でしょうか」
バトン――
その名前を聞いて、俺は昨日のある風景を思い出した。
バトン野菜農場。そんな立て札が立てられた畑の中で、俺はスキルの確認をしていた。
モナカの所か……
「それじゃあ最後の質問。ミルクちゃんとこが契約してる市場って、どこ？」
一言に市場と言っても、中心街にはいくつか市場が存在している。
「桜市場です」
桜市場ね。農作物を取り扱う市場の中では一番の大手だ。
「分かった。ありがとう」
「いいえ。クロウさんの役に立てたなら嬉しいです」
そう言ってはにかむミルクちゃん。多分問題解決に役立つからって意味なんだろうけど……

俺勘違いしちゃうよ！

「それじゃあ、そろそろ行くよ」
「はい。頑張って下さいねっ」
「おう！」

ミルクちゃんに見送られ、俺は次の目的地――バトン家へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3672x/

Tower of Babel

2011年10月28日06時50分発行